

カメルーン★どうでしょう

2024年10月
カメルーン通信 No.24
JICA 海外協力隊
出町 卓也

Souvenirs de deux années au Cameroun.

Bonjour! カメルーンからでまちです。先日、自費で図書館を作った学校の校長先生に、岐阜県のパンフレット（フランス語 ver.）を寄贈しました。日本の雰囲気や文章だけでなく、写真からも感じることができる、と大絶賛されました。

早速本棚に置いてみると、手に取り読んでくれる子どもたちが。この部屋には世界地図も貼ってあるので、日本の位置やカメルーンからの距離も知ることができます。Japon がどんな国なのか、このパンフレットから色々と想像してほしいです。



◇授業一色な活動の思い出。

この2年間の活動は、英語、時々体育の授業に明け暮れた日々でした。前回の復習から内容を思い出す時間や、生徒が多いのでミニ黒板を使って一斉に意見を話し合い、たくさん意見を出せる機会を作り、ノートをチェックして個々の理解度を確認し、声をかけていきました。一人ひとりを認識し大事にすること、できたことを褒めること、声をかけて関わりを持つこと。どれも岐阜県での教員生活で学んだことです。これらは私の活動の大きな柱になり、最後まで私を支えてくれました。



また、これらの手法や英文法が指導しやすくなるようにまとめたテキストを、現地の先生たちに配布し、研修を通してその使用方法を伝えました。内容は日本のやり方をただ実践するのではなく、カメルーンの授業スタイルを教わり、授業のアドバイスをもらいつつ、日本で得た知識や手法を組み合わせることで完成させました。新年度に入り、早速授業で活用してくれる先生もいて、嬉しかったです。

日本とカメルーン、それぞれの良さを取り入れてここの教育環境を高めたい。

という、ここに来る前に抱いていた願いに少しばかりは到達できたかな、と感じています。

子どもたちからは、週一回の授業を楽しみにしてもらえていました。腕を引っ張って教室に連れていかれたり、授業前から準備ができていたり。何よりも、授業中正解できて喜んだり、ノートにサインをもらってはしゃいだり、私のフランス語の発音や説明不十分な点を全力で指摘してきたり、と様々な場面で起こる子どもたちの笑顔が、私の励みになりました。

さらに、学校での話を学校外で広めてくれたおかげで、多くの大人にも私について知ってもらえ、感謝の言葉をもらいました。また、地域のサッカーチームに参加したおかげで、学校外のつながりもたくさんでき、町中で声をかけてもらうことが日常になりました。思い返せば辛いことや厳しいこともありましたが、それ以上に、ここの人々にエゼカの一員として私が認識されていることがとても嬉しいです。



◇言語よりも、伝えようとする気持ち。

2022年10月から書いてきたこの通信も最終号になりました。今月、私は2年間の任期を終えて日本に帰国します。2年間住んでいても、未だに言いたいことがなかなかうまく言えません。現地に住んでいるから喋れるようになる、とはとても言えず、自分で学習を続けることももちろん大切です。言語を教える立場ではありますが、言語は本当に難しいなと思います。



もどかしい思いも何度も感じました。ですがその分、たくさんの支えを実感できたとも言えます。

喋れる云々の前に、自分に言いたいことを伝えようとする気持ちがあれば、伝わる。

言語はコミュニケーション上における、ツールのひとつにすぎない。



語学スキルはあくまで活動を支えるものの一つであり、大事にすべきは自分の意思や考えをもち、どうにかコミュニケーションをとろうと相手と関わっていく気持ちだ、ということを実感しました。

怪しいフランス語を話す、いきなりやってきた東洋人を受け入れてくれたエゼカの町や事務所、学校現場には感謝でいっぱいです。今後はこの経験を活かし、引き続き教育の世界に身を置き、現場に貢献できるよう精進していきたいと思います。

それでは、これまでこの通信を読んでくださった全ての皆様へ、Merci beaucoup !